



# 『日向ぼん』

九谷 六口

木崎は、居たたまれない気持ちで呑み会に参加していた。

バブル崩壊以前、金融関連企業は隆盛を誇っていた。そして、企業間や業界内の情報交換も兼ね、セミナー、研究会などが頻繁に行われていた。

呑み会のメンバー四人は、その時知り合った仲間だ。既に十数年も続けている。だが、バブルの崩壊は凄まじく、金融業界の混乱は目を覆いたくなるほどのものだった。メンバーは、金融業界の再編などの波に巻き込まれ、皆、何回かの転職を経験している。

「で、俺の会社だけどさー……」

いつも口数の多い笹原が話し出した。笹原は、五十六歳。メンバーの中では一番年上だ。外資系証券会社に勤めていたが、経営状態は悪く、経営陣は人員削減にしか経費節減手段を見出せないでいた。仕事は増える一方。これでは身がもたない。その結果、止せばよいのに自己都合退職。微々たる退職金を見て苦笑したほどだった。辞めたのは二年前。一年間遊んだ後、今の会社に就職。一年ちょっとが過ぎている。

「売上げが上がらなくてね。普通だったら閉鎖だよ。株主が、まだやる気なんで頑張ってるけどね。給料は、きちんと貰っている。でも、さすがに気が引けることがあるよ。難しいねインターネットを使った商売は……」

たまたまたまた前の会社でマーケティング関連の仕事をしていたため、インターネットを媒体としたビジネスを進める会社に就職していた。

「うちは、まあまあなんですけど…… 経営者が立てる目標値って、いつも右上がりのおおきな数字ばかり。これゃー、幾ら遣っても達成率が付いていかないわっ。営業さんが大変」

メンバー唯一の女性、藤田が話を続けた。一番若い。損害保険会社の統計室に勤務している。

「最近思うの。男の人って、一日中何もせず、デスクに座ってられるのね。私なんか絶対に出来ないわ。どう言うつもりなのかしら。朝来てPCの前に座って五時半まで何もしないの。時間になればただ帰るだけ。たまに仕事来そうになると、人に廻しちゃうの。それが上手いの。要するに何もせず、ただ居るだけでお給料を貰っていることになるわ。女には出来ない」

「男だから、じゃないよ。女も同じだよ。人に依るんだよ」

笹原も、さすがにそんな真似はできない。

「貧乏性人間と、そうじゃない人間がいるんだよ。藤田さんは、貧乏性なんだよ。俺も、どっちかと言えば貧乏性だけど。でも、そうやって給料貰えるんだから悪くないんじゃない」

「私は、嫌！」

藤田の元同僚だった、伊東が口を開いた。

「うちはまた統合の話が出てるよ。落ち着かなくてね。貧乏閑なし。会社は続くと思うけど……。藤田さんは、相変わらず頑張っているの？」

「考えてみれば伊東さんと一緒に仕事してた時に比べれば、ヒッチャキになって仕事してないな」

「ところで木崎さんはどうなの」

— 来た来た。

笹原は、木崎と呼びつけにしたり、木崎君と呼んだりする。さんを付けた時は、大抵、茶化すときだ。木崎は、笹原に今の会社の状況を話したことがある。知っていながら聞いてきた。相変わらずの男だ。

「前の会社が無くなったから、その時の上司、同僚と三人で保険会社の代理店を始めたんだ。ちょっと変わった商品を扱っている」

「日本の会社なの」

藤田が聞いた。

「いや、外資系だ。本社は、アメリカにある」

「日本での実績はあるの。それに変わった商品で、どんな商品なんですか」

伊東は、いつも突っ込んでくる。

「まだ、始めたばかりだし……。日本ではこれからなんだ。9.11事件以降に作られた商品で、個人保険と団体保険のメリットを融合したユニークな企業向けの商品。しかも、大手企業向け。それだけ営業が難しい。商品の詳細は長くなる。三人の会社だけど、きちんとホームページもたてるから、それを見てよ」

「アメリカでは実績あるの」

伊東が、突っ込む。

「いや、まだ数件しかない。全社的にこれからなんだよ。これから」

「ところでお給料は」

藤田が聞いた。笹原は事情を知っているが今日は珍しく黙っている。

「営業に関する費用や事務所の家賃は、本社が持つけど、人件費までは持てないって事で……。要するに契約が取れるまでは、給料はなしっ」

「じゃー、無給なんだっ！」

笹原以外が驚いたように口を揃えて言った。

「そー、無給」

「ま、皆、大変なんだ」

笹原が、場を取り仕切るように言った。

— 皆、気楽だよ。何が大変なものか。売上げがないくせに給料を貰ったり、座っているだけで給料を貰ったり。三人ともノンビリしたもんだよ。こっちは汗水流して四苦八苦で働いているのに。それなのに、給料はなし。何処か間違っている。何処かが……

真面目な木崎は、真剣に悩みだしていた。

「おはようございます」

木崎は、オフィスのドアを開け中に入った。ボロボロのビルの五階。部屋は広い。不景気真っ最中のこの時期、結構安い家賃で広い部屋を借りることができる。

広いオフィスの片隅にデスクが三つ。社長の新井と技術者の若宮、そして木崎のデスクだ。調度品はデスク三つと本棚が一つしかない。部屋の広さが寒々しさを誘う。

「木崎君、今日は、ABC会社に行く予定だったね。この会社の契約は大口だ。絶対に落とさなければ駄目だよ」

「木崎さん、頑張ってください。我々の会社の将来は、ABCにかかっています。つまり、今日の木崎さんの頑張りに次第です。死に物狂いでやってください。お願いします」

「まあまあ若宮君。そう木崎さんにプレッシャーを掛けるものではないよ。木崎さんにだって良く判っていることなだから。ねー、木崎さん」

「社長、そうかも知れませんが、まだ、一件も契約を獲得できてないんですよ。営業担当取締役の木崎さんの役目です。もう半年も経つのに…… お二人には、貯金があるかも知れませんが、私はもう限界です。そろそろ給料を貰わないと遣っていけませんよっ！」

— 何言ってるんだ、ふざけるんじゃない。こっちだってそうそう貯金がある訳じゃない。苦しいのは同じだ。そんなに言うんだったら自分でも営業してみたらいいんだ。二人とも営業の大変さも知らないくせに。デスクに座って、あーだこーだ言って。

「ま、木崎さん。そんなふて腐れた顔をしないで……。そんな顔でABCさんに行ったら、事は上手く運ばないよ」

— この顔は生まれ付きのものだ。余計なお世話だ。

「とにかく…… 今からABCさんに行ってきます」

木崎は、階段を小走りで駆け下りた。エレベーターなどはない。一日に何回か上り下りをするが、さすがに疲れる。

初夏の太陽がコンクリートの地面を熱くしている。照り返しも凄い。

ABC会社はオフィスから五駅目。歩きを入れても三十分位しか掛からない。意を決してABC会社のビルに入った。

今、木崎は会社の近くにある公園のベンチに座っている。昼飯時間。手には牛乳瓶とアンパン。脇にはカバンを置いている。

— ニコニコ笑って聞いていたくせに、では、また、の一言だ。また駄目か。もう何件断われたんだろう。あの商品は、確かに被保険者を考えたすぐれた保険商品だ。何故、良さが判らないのだろう。私以外に説明できる者はいない。新井だって若宮にだって出来ない。その私が説明しても理解してもらえない。契約獲得は無理なのか…… アーア！

いつしか木崎はベンチで眠ってしまった。

ふと気が付くと陽は西に傾いている。

— いけない、会社に戻らなくては……

木崎は急に立ち上がった。脇に置いたカバンを掴み、会社に向け駆け出した。

— また、二人がトヤカク言うだろうな。余り五月蠅い事を言うようだったら、こっちにも覚悟がある。冗談じゃない。

五階まで駆け上がる。

「遅くなりました……？」

ドアを開けてビックリしてしまった。もう一度、ドアの会社名を確かめた。確かに自分の会社だ。

新井が気付いた。

「今まで何処に行ってたんだっ！。こっちに来たまえっ！」

オフィスには、二十人程の人間が居る。あの心寂しい雰囲気などはない。

皆、生き活きとデスクに向かい、カシャカシャとキーボードを叩いている。隅では、何人かが打ち合わせをしている。若宮は、偉そうに新井の斜め前に大きなデスクを構え、ふんぞり返っている。社員は、木崎に目もくれない。

「木崎君！ こっちに来たまえっ！」

今まで木崎さんだったはずだが木崎君と呼ぶ。木崎は、オズオズと新井の前に行った。

「ここでは何だ、あの隅のソファーに行こう」

心なしか新井の姿勢が良くなっている。

— どうなっているんだろう。たった数時間しか経っていないのに……

木崎は、狐に鼻を摘まれたような感じになっていた。

「さー、座りたまえ。さて話を聞こうか。この三ヶ月、連絡もなしに、何処に行っていたのかね」

— 三ヶ月？

「長期無断欠勤だ。会社としては、懲戒免職にすることもできる。しかし、互いに頑張ってきたのだし、そこまではするつもりはない。君が来なくなって三、四日後だったか、奥さんに連絡したよ。奥さんは、あー、そうですか、家にも帰っていませんがと言っただけだ。別に心配している様子もなかった。搜索願いで、と言ったら、あーら、お出しになるんでしたら、そちらでどうぞ、と言ってたよ。どうなっているのかね、君の家は。いや、そんな事はどうでも良い。何処で何をしていたのかね。しかも真っ黒に日焼けして…… まさか、ベンチで日向ぼっこばかりしていた訳ではないだろうね」

木崎は訳が判らなかったが、とにかく話のつじつまを合わせようと思った。

「いやー、済みません。ABCさんの帰りに、他の会社もと思いちょっと遠方に出かけてみたんです」

「遠方？ まー、良い。君が、ABCさんを出た後だったと思うが、先方さんから戻ったら、すぐ来てくれと連絡が入ったんだよ。それなのに君は、待てど暮らせど戻ってこない。仕方なく、木崎は急病で入院した。代わりに私が行くと知らせたよ。翌日、若宮と一緒に行ったら、契約の話だ。木崎さんの説明は、実に良かった。是非とも会社として契約したいとの事だった。その場で、契約成立だ。先方さんは、木崎さんが退院されたら是非、もう一度、お会いしたいと言っている。病気が上がり、そんな日焼けした顔じゃー困るが…… ま、近々、顔を出すように。君の行動には問題が多いが、このように会社が儲かるようになったのも、元はと言えば君の努力だ。無断欠勤だから、三ヶ月分の給料は払えない。しかし、ABCさんのお陰でかなりの契約金が入った。君も株主の一人だ。株の配当がある。ちょっと待て」

新井は、自分のデスクの横にある金庫を開けた。中から分厚い封筒を出した。

「さっ！ これが明細書だ。こっちが君への配当。二百万ある。ところで奥さんには会ったのかね？ まー、良いか。今は、私も忙しい。他人の家庭の事情までとやかく言う閑はない。今日は、帰って良いが、明日から、きちんと出社するように。あれが君のデスクだ」

新井の斜め前に、若宮と同じようなデスクがある。

「済みませんでした。明日からは、ちゃんと出社しますので。では、これは頂いておきます」

若宮の方に目をやると偉そうな態度で、ウィンクなどをしている。虫の好かない男だ。

家に帰るのは止めた。妻が何を言い出すか判らない。

あの公園に行き、あのベンチに座った。木崎は、懸命に考えたが状況を把握できなかった。

胸に手をやると分厚い札束の感触がある。明細書と封筒だ。やはり嬉しい。自然とニコニコした表情になってしまう。

気が付くと朝になっている。一晩、ベンチに座っていたのだ。胸に手をやると分厚い感触。時計を見ると出社時間の五分前。木崎は、急に立ち上がり駆け出す。まだ、間に合う。

儲かっているんなら、エレベーターのあるビルに替われば良いのに、などと考えながら階段を五階まで駆け上がる。

オフィスのドアを開けた。

ー アレッ！

部屋には何もなかった。ただ、汚れた床があるだけ。ドアを見る。会社の看板もない。

ー 変だなー。フロアーを間違えたのかな……

ガタンと音がしたので、振り向くと向かいのオフィスのドアが開き、事務員らしき女性が出てきた。

「ちょっと済みません。ここは五階ですよ」

「えー、五階ですけど……」

「この会社は、どうしたんでしょう。ご存知ですか」

「あら、私がここに来たのは、二ヶ月前ですけど、その時からこの部屋は、空き部屋と聞いていますよ」

その女性は怪訝そうな顔をして廊下を歩いていった。

「二ヶ月前から空き部屋……？」

木崎はトボトボと階段を下り、あの公園のあのベンチに。胸に手を遣る。

— 無いっ！

分厚い感触が無い。胸ポケットに手を入れると明細書はある。

— いけない、階段で落としたのかっ！

木崎は、急に立ち上がり厳しい顔で駆け出す。

— あったあった。

ドアの前に落ちていた。胸ポケットに入れ、ニコニコと笑いながら、あの公園のあのベンチに座り、胸に手を遣る。

— 無いっ！

分厚い感触が無い。胸ポケットに手を入れると明細書はあった。

木崎は、急に立ち上がり厳しい顔で駆け出す。

.....

某公園のベンチに、真っ黒に日焼けし、伸び放題の髪の毛、テカテカになった背広、ネクタイ姿のホームレスが居る。手には、ボロボロのカバンを持っている。

彼は、ニコニコ座っていたかと思うと胸に手を遣り、急に厳しい顔になり駆け出す。少し経つとニコニコ顔でベンチに戻り、座る。

また、胸に手を遣り、急に駆け出す……

毎日毎日、彼は、この動作を繰り返している。

(了)